

東海区水研卅周年を祝して、初期の思い出など

初代所長 宇田道隆

筆者は農林省水産講習所時代（昭和2年4月—同4年3月）、中央水産試験場時代（昭和4年4月—同17年10月）を勤めた後、神戸海洋气象台（昭和17年10月—20年）長崎海洋气象台（同20年—24年）を経て、東海区水産研究所発足と共に飯山太平洋水産庁長官と藤永元作調査研究部長が長崎へ来られて懇請を受け、昭和24年8月—同26年3月の短期間ながら、初代の東海区水産研究所長を勤めさせて頂いた。八海区水研発足の激動時代を経験、そして26年4月から東京水産大学教授に移って昭和43年定年を迎えた。

このたび水研も30周年を祝賀されるに当たり、心よりお喜びを申し上げますと共に、「30にして立つ」、将来への新しい発展を2百裡新海洋法の時代に水産食糧資源の開発確保のために希望して止まない。次にいささか思い出と所感を記したい。

当時は占領軍 GHQ（水産部長 W. ヘリントン）の指揮下にあり、中央水試を解体して八海区にしたのも勿論米国の水産行政方式によるものであった。東海区水研に同居していた数百名の研究者が全国七海区に散らばるのには数年を要し、戦後の食糧や居住等の悪事情から特に困難な研究生活環境にあったが、それぞれにそれらを克服するため、時には激論もし、水研の仕事の第一が日本水産資源研究でその最適生産値を算出することとされた。これへの努力は八海区水研の功績になるだろう。会議、会議で忙殺される始末であった。

東海区水研は全国的な「イワシ資源調査」を担当し、中井甚二郎資源部長を中心に数十名が海陸に活動し、休みなく卵稚仔魚と環境条件など綿密な調査を蒼鷹丸などフルに動かして進めた。1959年にローマでの「世界イワシ・ニシン族生物学会議」が開かれたとき日本から10篇の報告をまとめて中井氏と筆者（外遊中）が出席し、賞讃を博した。伊東祐方、林繁一、本城康至、服部茂昌など諸氏も皆若かった。資源数理は田内森三郎博士（二代目の中央水産試験場長）の草分けの指導で、栗田晋、田中昌一、土井長之、山中一郎、福田嘉男などの諸氏が活躍、国際的にマグロ、底魚、鯨、イワシ、サンマ、イカ、サバなど資源量 MSY 算出などに功績を上げたが環境要因の導入には未だ成功していない。海洋環境では渡辺信雄、平野敏行、上原進、藤本実、杉浦健三、氏らが北洋漁場、黒潮稚仔卵漂流拡散、沿岸海洋学など成果を収めた。最近では沢田、須藤氏など汚染海洋学で放射性廃棄物深海投棄などの研究、友定彰氏の東北海区暖水塊分離など目立った仕事がある。松川康夫氏は温排水など調べている。

漁具漁法部も高山、川田、武富、矢島、小山、三次、森、田原など諸氏が全国水研の中心的活動を続けた。漁と環境についてカツオ、マグロ、サバ、イワシなど川崎健、宇佐美、近藤氏などの研究が地道に続けられプランクトンの本城、鈴木氏などの研究と共に、漁況予報の基礎となった。卓越魚種交代は漁況の位相に対応している。これからは長期漁況変動予測のための息の長い研究が必要となる。40年も間隔をおいてのマイワシ大漁リバイバル百数十万トンを算し、サバ漁も百万トンこえる資源高位持続の謎は、黒潮冷水塊蛇行出現や、豆南七島の地形性湧昇による肥沃化などに原因があると思われる。漁業資源研究協議会が結成せられて高度な水

産資源の調査研究の論議が重ねられ、その成果の会報は貴重である。しかし漁況予報の原理として実用化、実質的適中率などとなると道はほど遊い。現在では水産海況、漁況の全国的取りまとめ組織がうまくない。

浅海増殖、栽培漁業には滝、日下部、須藤、相良、田中等諸氏により過去30年間長足の進歩をもたらし、新たな漁村のホープとなった。しかし赤潮頻出、自己汚染、密植、ホタテ毒化といったミクロの環境悪化の問題が未解決である。北森良之介氏は底棲生物から海底汚染をしらべた。

人工漁礁の問題も小川良徳氏など実験的研究を続けており、全国的に水産工学的に究明されているが、天然漁礁の優良なものとの対比研究による実際海中の環境条件調査に不備のように思われる。例えば漁礁における渦流、湧昇流、収束などが天然餌料にどう影響しているかを知ることである。

水産物製造利用の研究は天野慶之、山川健重、鈴木たね子氏ほか多数の研究者によるイワシ、カマボコ、マリニビーフ、オキアミ利用、魚油脂等々伝統的には全国水産研の中核的研究を進めて来ている。洋上で新鮮度を保つ製品の研究、原料水産化学的研究なども盛んに行われている。実験工場施設をもつ現場研究がもっと盛んになる必要がある。(魚の旬、味など)。魚類学では世界的に名高い阿部宗明博士が浮魚、底魚、深海魚など長年水産市場開発にも貢献しておられる。又イカタコ貝類について浜部、奥谷、川上、高野など田中(弥)諸博士の基礎的な研究がある。

又著鷹丸船長黒肱氏の農林省船舶研究史、一等航海士勝呂氏らの GEK 研究、漁撈の田原陽三氏の魚探等機器研究、鉄健司氏の魚群量検出研究もなされている。しかし、水産付着生物の物理化学的環境汚染研究については定置漁場、原発、温排水等の関係で重要だと考えるが、盲点になっているようである。新田忠雄博士、町田喜弘博士が汚染化学的研究を盛んにされたが農業、洗剤関係と生物濃縮は農林省の内部事情もあってこれも研究が充分なされていないようである。油、PCB 等々問題は多い。30周年経過して新たな酒を古い皮囊に盛るについて、強力な海洋生活環境研究を長期的研究に焦点をおいて全国の中核として積極的に進め、2百連新海洋時代に総合的判断のできるように学術的に進めて頂きたい。水産食糧の質的、量的予測を確実にし資源を確保するためである。水産経済、経営は水産庁や関係諸団体で進められるであろう。若い力を結集してやるべき時機に来ている。昭和2—4年ごろと、昭和21—24年ごろ若い研究者が大量採用されて、もう弗々新出発の時に来ている。やはり20代、30代の「活き」のよい研究者が第一線で活動するのだから研究は栄えない。リモートセンシングなど人工衛星とか、飛行機調査とか併用すべき時代である。実験的研究も要る。「創造」「創意」が重んぜられねばならない。機動隊のような問題を集中的に解決するタスク・フォースも必要であろう。